

昔からの言い伝え・伝説・行事

十一月十六日の祭礼には参拝者が列をなしたといわれている。当時中組講中では当番宿でおこもりをした。壁屋橋の下でみそぎをし、白装束に身をかためて参拝したと伝えられている。おこもり中に使用した箸を、その辺に捨てては不浄であるということで、羽山参道鳥居の手前沢に納めたと語り継がれている。現在もその場を「箸納」と呼んでいる。このしきたりは大正年間まで続いていた。また梶野地区にも講中があり、正宝院におこもりをし翌日参拝したといわれている。

(小島の歴史と文化財)

酉の日 (四月上旬)

この日部落の女人達が相談して山登りをして、すしや煮物をもって浩然の気を養う。

(川俣町史資料)

麓山のおこもり (旧暦十一月十七日)

太郎坊山で法印がホラを吹き、若者がおこもりする。

伊達郡村誌には「東は下手渡村に属し西南北は本村に

属す險にして、樹木を生せず、より溪水を出す流れて小手川に入る。」と記されている。

昔、「柗山」とか「太郎山」とか言う草相撲の巨漢関取がいた。毎日稽古のために、三百田の土を背負って、羽山神社まで運んでいた。神社の後ろに小高い丘があるが、その土はもともと三百田の土であると言う。

名前の由来を求めて

『俗説 太郎坊山』

大むかし、太郎坊山は別名「羽山岳」と言った。山頂から少し下ったところに、羽山宮があった。羽山岳は、よく雨を降らす山だった。何年かに一度、雨雲が羽山岳にぶつかり洪水をおこし、山頂の土や草木を押し流し里の田畑を埋めてしまうことがあった。村人たちは困っていたが、羽山岳は日増しにハゲ山になっていった。

その頃、麓近くの三百田という所に柿の古木に寄りかかるように、小さな庵があった。そこには、行き倒れた旅の老僧が村人たちに救われて住んでいたが、子どもた